

【晉紀九】 起屠維大荒落，盡重光協洽，凡三年。

■西晉、▲慕容氏、漢劉氏漢（前趙）、続国訳漢文大成．経子史部 第 5 卷 237p

孝懷皇帝中永嘉三年（己巳，309年）

漢【劉淵は洛陽に都せんとす】春，正月，辛丑（1日）朔，熒惑は紫微（星座の名前）を犯す。漢の太史令宣の於修之は、漢主の淵に言つて曰く、

「出でずして三年，必ず洛陽に克たん。蒲子は崎嶇（険しい、容易でない）にして，以て久しく安んじ難し。平陽（山西省河東道臨汾県、現・臨汾市堯都区）の氣象は方に昌かなり，徙りて之に都するを請う。」
淵は之に従う。大赦し，改元して河瑞とする。（時に汾水より玉爾を得たので改元）

【何一族の全滅】

■【南諸州も乱れる】三月，戊申（9日），高密の孝王の略は蕩ず。尚書左僕射の山簡を以て征南將軍、都督荆、湘、交、廣四州諸軍事と為し，襄陽に鎮ぜしむ。簡は，濤之子也，酒を嗜み，政事に恤えず。表して、

「順陽内史の劉璠は衆心を得たり，恐らくは百姓は璠を劫かして主と為さん。」
詔して璠を征して越騎校尉と為す。南州は是に由りて遂に亂れ，父老は劉弘を追思せざる莫し。（5-238p）

■【司馬越是側近の何綏を冷酷に誅殺】丁巳（18日），太傅の越（前年より滎陽に入る）は滎陽より京師（洛陽）に入る。中書監の王敦は親する所に謂つて曰く、

「太傅は専ら威權を執り，而して選用表請は，尚書が猶ほ舊制を以て之を裁す，今日之來るや，必ず誅する所有り。」

帝之太弟為る也，中庶子の繆播と親善なり，即位するに及び，播を以て中書監（晉書本紀・繆播には中書令とす）と為し，繆胤を太僕卿（太僕は九卿なり、晉の官には卿無し）と為し，委ねるに心膂を以てす。帝の舅の散騎常侍の王延、尚書の何綏、太史令の高堂沖は，並びて機密に參す。越是朝臣の己に貳（心）あるを疑い，劉輿、潘滔は越に勸めて播（越が河間に勝つのに貢献）等を悉く誅せしむ。越是乃ち播等は亂を為さんと欲すと誣い，乙丑（26日），平東將軍の王秉を遣わして，甲士三千を帥いて宮に入らしめ，播等十餘人を帝の側に執り，廷尉に付し，之を殺す。帝は歎息流涕し而して已む。綏は，曾之孫也。初め，何曾は武帝の宴に侍し，退きて，諸子に謂つて曰く、

「主上は大業を開創し，吾は宴見する毎に，未だ嘗て經國の遠圖を聞かず，惟だ平生の常事を説き，厥の孫謀（子孫のための計画）を貽す之道に非らざる也，身に及ぶ而して已む，後嗣は其れ殆うし乎！汝が輩は猶ほ以て免る可し。」

諸孫を指して曰く、

「此の屬は必ず難に及ばん。」（何曾は子に累が及ぶを予見）

及ち綏は死し，兄の嵩は之を哭いて曰く、

「我が祖は其の殆んど聖なる乎！」

曾は日々萬錢を食し，猶ほ箸を下ろす處無きを雲う。子の劭は，日々に二萬を食す。綏及び弟の機、羨，汰侈（身分不相応に奢る）は尤も甚し。人に書疏を與えるに，詞禮は簡傲（大まかで驕り高ぶる）なり。河内の王尼

は綏の書を見、人に謂って曰く、

「伯蔚(何綏の字)は亂世に居り而して矜きやうごう豪なること乃ち爾しかり、其の能く免かれん乎？」
人は曰く、

「伯蔚は卿の言を聞き、必ず相い危害せん。」

尼は曰く、

「伯蔚は比このごろ我が言を聞き、自ら己に死せん矣！」
永嘉之末に及び、何氏は遺種無し。(何氏は子孫全滅)

■ 何曾の明と不明、忠臣にあらず 臣光曰く、

「何曾は武帝の偷惰にして、目前を過ぎるを取り、遠慮を為さざるを譏(続は議)る。天下は將に亂れんとし、子孫は必ず其の憂いに與あずからんことを知る、何ぞ其の明なる也！然るに身は僭侈(過分な奢侈)を為し、子孫をして流れを承け、卒に驕奢を以て族を亡ぼさ使む、其の明は安んぞ在る哉！且つ身は宰相と為り、其の君之過ちを知り、以て告げず而して家に於いて私語するは、忠臣に非らざる也。

■ 太傅の越は王敦を以て揚州刺史と為す。

■ 前涼劉寔は連年老を請い(引退要望)、朝廷は許さず。尚書左丞の劉坦は上言す、

「古之老を養うは、事せず(事に任じず)して以て憂と為す、之を吏とするを以て重しと為さず、謂うに宜しく寔の守る所を聽ゆるすべし。」

丁卯(28日)、寔に詔して侯を以て第に就かしむ。王衍を以て太尉と為す。

■ 司馬越是警戒して私兵が宿衛 太傅の越は兖州牧を解き、司徒を領す。越は頃來(楊駿誅殺など数々)事を興すに、多くは殿省に由るを以て、乃ち奏す、

「宿衛の侯爵有る者は皆な之を罷めん。」

時に殿中の武官並びに封侯は、是に由りて出でる者は略盡ほぼき、皆な泣涕し而して去る。(5-239p) 更めて右衛將軍の何倫、左衛將軍の王秉をして東海國の兵(司馬越の私兵)數百人を領して宿衛せ使む。

■ 漢劉淵は黎陽攻めの劉景を降格 左積弩將軍の朱誕は漢に奔り、具に洛陽の孤弱を陳べ、漢主の淵に之を攻めるを勧める。淵は誕を以て前鋒都督と為し、滅晉大將軍の劉景を以て大都督と為し、兵を將いて黎陽を攻めしめ、之に克つ。又た王堪を延津に敗り、男女三萬餘人を河に沈める。淵は之を聞き、怒りて曰く、

「景は何の面ありてか復た朕に見えるや？且つ天道は豈に能く之を容れるや？吾が除かんと欲する所の者は、司馬氏耳なり、細民に何の罪あるや？」

景を黜けて平虜將軍と為す。

■ 夏、大旱し、江、漢、河、洛は皆な竭き、渉る可し。(河が竭くは亡国の兆し)

■ 漢石勒は君子營の參謀群を持つ 漢の安東大將軍の石勒は巨鹿、常山を寇し、衆は十餘萬に至り、衣冠の人物を集めて、別に君子營と為す。趙郡の張賓を以て謀主と為し、刁膺ちやうようを股肱と為し、夔安きあん、孔萇、支雄、桃豹とうめいを爪牙と為し、并州の諸胡羯は多く之に従う。

■ 漢張賓は頭角を現す 初め、張賓は讀書を好み、闊達にして大志有り、常に自ら張子房に比す。石勒が山東を徇とるに及び、賓は親する所に謂って曰く、

「吾は諸將を歴觀し、此の胡將軍(石勒は胡出身)に如く者は無く、與に共に大業を成す可し！」

乃ち劍を掲げて軍門に詣り、大呼して見えんと請う、**勒**は亦た未だ之を奇とせざる也。**賓**は數々策を以て**勒**を干し、已に而して皆な言う所の如し。**勒**は是に由りて之を奇とし、署して軍功曹と為し、動靜は之に咨る。

漢【劉琨は壺關に敗れる】漢主の淵は王彌を以て侍中、都督青、徐、兗、豫、荆、揚六州諸軍事、征東大將軍、青州牧と為し、楚王の聰と共に壺關（現・山西省長治市壺關県）を攻めしめ、**石勒**を以て前鋒都督と為す。

劉琨は護軍の**黃肅**、**韓述**を遣わして之を救わしめ、**聰**は**述**を西澗（壺關の東南）に敗り、**勒**は**肅**を封田（壺關の東南）に敗り、皆な之を殺す。太傅の**越**は淮南内史の**王曠**、將軍の**施融**、**曹超**を遣わして兵を將いて**聰**等を拒ましむ。**曠**は河を濟り、長驅して而して前まんと欲し、**融**は曰く、

「彼は險に乗じて間出し、我は數萬之衆有ると雖も、猶ほ是れ一軍にて獨り敵を受ける也。且く當に水を阻みて固めと為し以て形勢を量り、然る後に之を圖之るべし」

曠は怒りて曰く、

「君は衆を沮まんと欲する邪！」

融は退き、曰く、

「彼は善く兵を用い、**曠**は事勢に暗く、吾が屬は今必ず死せん矣！」

曠等は太行（山脈）を逾え**聰**と会い、長平（上黨郡の県、山西省冀寧道襄垣県、現・長治市襄垣県）之間に戦い、**曠**の兵は大いに敗れ、**融**、**超**は皆な死す。

漢**聰**は遂に屯留、長子を破り、凡そ斬獲は萬九千級なり。上黨太守の**龐淳**は壺關を以て漢に降る。**劉琨**は都尉の**張倚**を以て上黨太守を領せしめ、襄垣（山西省冀寧道襄垣県、現・長治市襄垣県）に據る。

匈奴【匈奴の鐵弗氏】初め、匈奴の**劉猛**は死し（79 卷武帝太始八年）、右賢王の**去卑**の子之**誥升爰**は代わりて其の衆を領す。**誥升爰**は卒し、子の**虎**は立ち、新興に居り、鐵弗氏（後に赫連勃勃に繋がる）と號し、白部鮮卑と皆な漢に附く。**劉琨**は自ら將に**虎**を撃たんとし、**劉聰**は兵を遣わして晉陽を襲わしめ、（5-240p）克たず。

漢五月、漢主の淵は子の**裕**を封じて齊王と為し、**隆**を魯王と為す。

【劉聰は再々洛陽攻略失敗】

漢■【劉聰油断して洛陽攻略失敗】秋、八月、漢主の淵は楚王の**聰**等に命じて進みて洛陽を攻めしむ。平北將軍の**曹武**等に詔して之を拒ましめ、皆な**聰**の敗る所と為る。**聰**は長驅して宜陽に至り、自ら驟々勝つを待み、怠りて備えを設けず。九月、弘農太守の**垣延**は詐りて降り、夜に**聰**の軍を襲い、**聰**は大敗し而して還る。

■【王浚は飛龍山で石勒撃退】**王浚**は**祁弘**を遣わして鮮卑の**段務勿塵**と與に**石勒**を飛龍山（直隸省保定道獲鹿県の東南、現・石家荘市鹿泉区）に撃ち、大いに之を破り、**勒**は退きて黎陽に屯す。

漢■【劉聰の再度の洛陽攻略失敗】冬、十月、漢主の淵は復た楚王の**聰**、**王彌**、始安王の**曜**、汝陰王の**景**を遣わして精騎五萬を帥いて洛陽を寇し、大司空の雁門の剛穆公の**呼延翼**（匈奴四姓の最も貴し）は歩卒を帥いて之に繼ぐ。丙辰（21日）、**聰**等は宜陽に至る。朝廷は漢兵の新たに敗れるを以て、其の復た至るを意わず、大いに懼れる。辛酉（26日）、**聰**は西明門（洛陽の西面南東の第二門）に屯す。北宮の**純**等は夜勇士千餘人を帥いて出でて漢壁を攻め、其の征虜將軍の**呼延顥**を斬る。壬戌（27日）、**聰**は南に洛水（洛陽の南を流れる）に屯す。（十一月）乙丑（1日）、**呼延翼**は其の下に殺す所と為り、其の衆は大陽より潰えて歸る。淵は**聰**等に師を還すを敕す。**聰**は表して、

「晉兵は微弱なりて、翼、顥の死する故を以て師を還す可からず」
と稱し、固く留まりて洛陽を攻めるを請い、淵は之を許す。太傅の越は城を嬰して自ら守る。戊寅（14日）、聰は親ら嵩山（河南の陽城県に有り、河南省河洛道登封県、現・鄭州市登封市、少林寺のある所）に祈り、平晉將軍の安陽哀王の厲、冠軍將軍の呼延朗を留めて留軍を督攝せしむ。太傅の參軍の孫詢は越に説き、虚に乗りて出でて朗を撃ち、之を斬り、厲は水に赴きて死す。王彌は聰に謂って曰く、

「今軍は既に利を失い、洛陽の守備は猶ほ固く、運車は陝（洛水との距離有り）に在り、糧食は數日を支えず。殿下は龍驤（淵の族子劉曜）と與に平陽に還り、糧を裹み卒を發すに如かず、更に後舉を為さん。下官も亦た兵穀を收め、命を充、豫に待たん、亦た可ならず乎？」

聰は自ら留まるを請うを以て、未だ敢て還らず。宜於修之は淵に言つて曰く、

「歳は辛未に在り、乃ち洛陽を得る。今晉の氣は猶ほ盛んにして、大軍は歸らざれば、必ず敗れん。」

淵は乃ち聰等を召して還らしむ。

大成 **〔成の荀琦の反乱〕** 天水人の荀琦等は成の太尉の李離、尚書令の閻式を殺し、梓潼（四川省西川道梓潼県、現・綿陽市梓潼県）を以て羅尚に降る。成主の雄は太傅の驥、司徒の雲、司空の璜を遣わして之を攻めしめ、克たず、雲、璜は戦死する。

大成 **〔成と晉との攻防〕** 初め、譙周には子有りて巴西に居り、成の巴西太守の馬脫は之を殺し、其の子の登は劉弘に詣り兵を請い以て復仇せんとす。弘は登を表して梓潼内史と為し、自ら巴、蜀の流民を募ら使めて、二千人を得る。西上して、巴郡に至り、羅尚に従いて兵を益さんと求めるも、得ず。登は進みて宕渠（四川省嘉陵道南充県、現・南充市順慶区）を攻め、馬脫を斬り、其の肝を食らう。會々梓潼は降り、登は進みて涪城に據る。雄は自ら之を攻め、登の敗る所と為る。（5-241p）

漢 **■** **〔石勒と王彌の勢力拡大〕** **十一月**、甲申（20日）、漢の楚王の聰、始安王の曜は平陽に歸る。王彌は南に轅轅（洛陽八閩の一）に出でて、流民之潁川、襄城（潁川郡の元県で武帝泰始二年に襄城郡、現・河南省許昌市襄城県）、汝南、南陽、河南に在る者は數萬家、素より居民の苦しむ所と為り、皆な城邑を焼き、二千石、長史を殺し以て彌に應じる。石勒は信都（直隸省保定道冀県治の東北、現・邢台市信都区）を寇し、冀州刺史の王斌を殺す。王浚は自ら冀州を領す。車騎將軍の王堪、北中郎將の裴憲に詔して兵を將いて勒を討たしめ、勒は兵を引いて還り、之を拒む。魏郡太守の劉矩は郡を以て勒に降る。勒は黎陽に至り、裴憲は軍を棄てて淮南に奔る、王堪は退きて倉垣（河南省開封道開封県、現・開封市祥符区）を保つ。

漢 **■** **〔曹嶷は青州に行く〕** **十二月**、漢主の淵は陳留王の歡樂を以て太傅と為し、楚王の聰を大司徒と為し、江都王の延年を大司空と為す。都護大將軍の曲陽王の賢を遣わして征北大將軍の劉靈、安北將軍の趙固、平北將軍の王桑と與に、東に内黄（河南省河北道内黄県、統の河南省は誤り、現・安陽市内黄県）に屯せしむ。王彌は左長史の曹嶷を表して行安東將軍とし、東に青州を徇え、且つ其の家（王彌の家は東來にあり）を迎えしむ。淵は之を許す。

■ **〔勃海・遼東の大混乱〕** 初め、東夷校尉の勃海の李臻は、王浚と約して共に晉室を輔け、浚は内に異志有り、臻は之を恨む。和演之死（85 卷惠帝永興元年）する也、別駕の昌黎の王誕は亡げて李臻に歸し、臻を説き兵を擧げ浚を討たしむ。臻は其の子の成を遣わして兵を將いて浚を撃たしむ。遼東太守の龐本、素より

臻と隙有り、虚に乗りて襲いて臻を殺し、人を遣わして成を無慮（遼東郡、奉天省遼瀋道北鎮県治、現・錦州市北鎮市）に殺さしむ。誕は亡げて慕容廆に歸す。詔して勃海の封釋を以て臻に代りて東夷校尉と為し、龐本は復た之を殺さんと謀る。釋の子の俊は釋に勧めて兵を伏して本を請い、收めて之を斬り、悉く其の家を誅す。

孝懷皇帝中永嘉四年（庚午，310年）

■春，正月，乙丑（1日）朔，大赦す。

漢漢主の淵は單征（氏の族長、前卷二年に漢に歸す）の女を立てて皇后と為し、梁王の和を皇太子と為し、大赦す。子の義を封じて北海王と為す。長樂王の洋を以て大司馬と為す。

漢〔石勒は王彌と徐豫兗に勢力拡大〕漢の鎮東大將軍の石勒は河を濟り、白馬を抜き、王彌は三萬の衆を以て之に會し、共に徐、豫、兗州を寇す。二月，勒は鄆城を襲い、兗州刺史の袁孚を殺し、遂に倉垣を抜き、王堪を殺す。復た北に河を濟り、冀州の諸郡を攻め、民の之に従う者は九萬餘口なり。

大成成の太尉の李國は巴西に鎮し、帳下の文石は國を殺し、巴西を以て羅尚に降る。

■〔司馬睿は錢璠を討伐〕太傅の越は建威將軍の吳興の錢璠及び揚州刺史の王敦を征す。璠は敦を殺して以て反せんと謀り、敦は建業に奔り、琅邪王の睿に告げる。璠は遂に反し、進みて陽羨（吳興郡の県、江蘇省楚常道宜興県の南五里、現・無錫市宜興市）を寇し、睿は將軍の郭逸等を遣わして之を討たしむ。（5-242p）周玘は郷里を糾合し、逸等と共に璠を討ち、之を斬る。玘は三たび江南を定め、睿は玘を以て吳興太守と為し、其の郷里に於いて義興郡を置き以て之を旌す。

■曹嶷は大梁より兵を引いて而して東し、至る所皆な下し、遂に東平に克ち、進みて琅邪を攻める。

■夏，四月，王浚の將の郝弘は漢の冀州刺史の劉靈を廣宗（県、直隸省大名道威県、現・邢台市威県）に敗り、之を殺す。

大成〔李雄の將張寶は梓潼を騙し取る〕成主の雄は其の將の張寶に謂って曰く、

「汝は能く梓潼を得れば、吾は李離之官を以て汝を賞せん。」

寶は乃ち先ず人を殺し而して亡げて梓潼に奔り、荀琦等は之を信じ、委ねるに心腹を以てす。會々羅尚は遣使して梓潼に至り、琦等は出でて之を送る。寶は後より門を閉じ、琦等は巴西に奔る。雄は寶を以て太尉と為す。

■幽、并、司、冀、秦、雍の六州は大いに蝗し、草木、牛馬毛を食いて皆な盡く。

漢〔漢の懷包圍、河内の攻防〕秋，七月，漢の楚王の聰、始安王の曜、石勒及び安北大將軍の趙固は河内太守の裴整を懷（河南省河北道泌陽県又は武陟県、現・焦作市沁陽市又は武陟県）に圍み、詔して征虜將軍の宋抽に懷を救わしむ。勒は平北大將軍の王桑と逆えて抽を撃ち、之を殺す。河内人は整を執り以て降り、漢主の淵は整を以て尚書左丞と為す。河内の督將の郭默は整の餘衆を收め、自ら塢主と為り、劉琨は默を以て河内太守と為す。羅尚は巴郡に卒す、詔して長沙太守の下邳の皮素を以て之に代えしむ。

【劉淵卒し、遂に劉聰立つ】

漢〔英雄劉淵の卒〕庚午（9日），漢主の淵は疾に寝る。辛未（10日），陳留王の歡樂を以て太宰と為

し、長樂王の洋を太傅と為し、江都王の延年を太保と為し、楚王の聰を大司馬、大單于と為し、並びに尚書事を録せしむ。單于台を平陽の西に置く。齊王の裕を以て大司徒と為し、魯王の隆を尚書令と為し、北海王の乂を撫軍大將軍と為し、司隸校尉を領せしめ、始安王の曜を征討大都督と為し、單于左輔を領せしめ、廷尉の喬智明を冠軍大將軍と為し、單于右輔を領せしめ、光祿大夫の劉殷を左僕射と為し、王育を右僕射と為し、任顥を吏部尚書と為し、朱紀を中書監と為し、護軍の馬景に左衛將軍を領せしめ、永安王の安國に右衛將軍を領せしめ、安昌王の盛、安邑王の欽、西陽王の璿は皆な武衛將軍を領せしめ、分けて禁兵を典る。初め、盛は少き時、讀書を好まず、唯だ《孝經》、《論語》を讀み、曰く、

「此を誦して能く行えば、足りる矣、安んぞ多く誦し而して行わざるを用いん乎！」

李燾は之を見、歎じて曰く、

「之を望めば易きとする可きが如し、至るに及びて、肅として嚴君の如し、君子と謂う可し矣！」

淵は其の忠篤を以て、故に終わりに臨みて委ねるに要任を以てす。丁丑（16日）、淵は太宰の歡樂等を召いて禁中に入れ、遺詔を受け政を輔けしむ。己卯（18日）、淵は卒す。太子の和（字は玄泰、淵の嫡子）は即位す。

漢 **[劉和は猜疑心強く自滅し、劉聰に破られる]** 和の性は猜忌にして恩無し。宗正の呼延攸は、翼之子也、(5-243p) 淵は其の才行無きを以て、終身官に遷さず。侍中の劉乘は、素より楚王の聰を惡む。衛尉の西昌王の銳は、顧命に預からざるを恥じる。乃ち相い與に謀り、和を説いて曰く、

「先帝は輕重之勢いを惟おもわず、三王をして強兵を内に總べ使め、大司馬(劉曜)は十萬の衆を擁して近郊に屯す、陛下は便ち寄坐(大權は己より出ず、位を臣民の上に託し勢いは寄寓に同じ)を為す耳。宜しく早く之が計を為すべし。」

和は、攸之甥也、深く之を信じる。辛巳（20日）夜、安昌王の盛、安邑王の欽等を召いて之を告げる。

盛は曰く、

「先帝の梓宮は殯に在り、四王(劉聰は第四子なり)は未だ逆節有らず、一旦自ら相い魚肉とすれば、天下は陛下を何と謂うや！且つ大業は甫はじめて爾しかり、陛下は讒夫之言を信じて以て兄弟を疑う勿かれ。兄弟は尚ほ信じる可からざれば、他人は誰だ信ずるに足る哉！」

攸、銳は之を怒りて曰く、

「今日之議は、理は二有る無し、領軍は是れ何の言乎！」

左右に命じて之を刃せしむ。盛は既に死し、欽は懼れて曰く、

「惟だ陛下の命のままなり！」

壬午（21日）、銳は馬景を帥いて楚王の聰を單于台に攻め、攸は永安王の安國を帥いて齊王の裕を司徒府に攻め、乘は安邑王の欽を帥いて魯王の隆を攻め、尚書の田密、武衛將軍の劉璿をして北海王の乂を攻め使む。密、璿は乂を挾みて關を斬り聰に歸し、聰は命じて甲を貫き以て之を待たしむ。銳は聰の備え有るを知り、馳せ還り、攸、乘と共に隆、裕を攻める。攸、乘は安國、欽の異志有るを疑い、之を殺す。是の日、裕を斬り、癸未（22日）、隆を斬る。甲申（23日）、聰は西明門(劉淵は平陽の門は洛陽と同名にする)を攻め、之に克つ。銳等は走りて南宮に入り、前鋒は之に隨う。乙酉（24日）、和を光極(殿)の西室で殺し、銳、攸、乘を収めて、通衢に梟首する。

漢 **[劉聰の即位]** 群臣は聰(字は元明)が帝に即位するを請う。聰は北海王の乂が、單后之子也を以て、以て位を之に譲らんとする。乂は涕泣して固く請い、聰は久しく而して之を許して、曰く、

「乂及び群公は正に禍難は尚ほ殷にして、孤が年長なるを貪ぼるを以てす故耳。此れ家國之事なり、孤は

何の敢えて辞さん！又の年長じるを俟ち、當に大業を以て之に歸さん。」

遂に即位す。大赦し、改元して光興とする。單氏を尊びて皇太后と曰い、其の母の張氏を帝太后と曰う。義を以て皇太弟と為し、大單于、大司徒を領せしむ。其の妻の呼延氏を立てて皇后と為す。呼延氏は、淵の後之従父妹也。其の子の粲を封じて河内王と為し、易を河間王と為し、翼を彭城王と為し、慳を高平王と為す。仍って粲を以て撫軍大將軍、都督中外諸軍事と為す。石勒を以て并州刺史と為し、汲郡公に封じる。

漢 **【略陽の蒲洪は自立】** 略陽（甘肅省渭川道秦安県、現・天水市秦安県）の臨渭氏曾の蒲洪は、驍勇にして多く權略あり、群氏は畏れて之に服す。漢主の聰は遣使して洪を拜して平遠將軍とし、洪は受けず、自ら護氏校尉、秦州刺史、略陽公を稱す。九月、辛未（11日）、漢主の淵を永光陵に葬し、諡して光文皇帝と曰い、廟號を高祖とする。（5-244p）

【漢の膨張と晉の諸勢力】

■ **【王如は反乱して漢に称藩】** 雍州の流民は多く南陽に在り、詔書して郷里に遣り還す。流民は關中の荒殘するを以て、皆な歸るを願わず。征南將軍の山簡、南中郎將の杜蕤は各々兵を遣わして之を送り、期を促して發せ令む。京兆の王如は遂に潜かに壯士を結び、夜二軍を襲い、之を破る。是に於いて馮翊の嚴巖、京兆の侯脱は各々衆を聚めて城鎮を攻め、令長を殺し以て之に應じ、未だ幾もならずして、衆は四五萬に至り、自ら大將軍、領司、雍二州牧と號し、漢に稱藩す。

漢 **【洛陽へ再々侵攻】** 冬、十月、漢の河内王の粲、始安王の曜及び王彌は衆四萬を帥いて洛陽を寇し、石勒は騎二萬を帥いて粲に大陽に於いて會し、監軍の裴邈を灑池に敗り、遂に長驅して洛川に入る。粲は輾轅に出、梁、陳、汝、潁の間を掠す。勒は成皋關（鄭州市滎陽市汜水鎮西北）に出、壬寅（13日）、陳留太守の王贇を倉垣に圍み、贇の敗る所と為り、退いて文石津（河北の東垣の東北、枋頭の東南）に屯す。

■ **【代** **【劉琨は拓跋猗盧と同盟し劉虎を撃ち、王浚と隙】** 劉琨は自ら將いて劉虎及び白部（鮮卑）を討ち、遣使して辭を卑しくし禮を厚く鮮卑の拓跋猗盧を説いて以て兵を請う。猗盧は其の弟の弗之子の鬱律をして騎二萬を帥いて之を助け使め、遂に劉虎、白部を破り、其の營を屠る。琨は猗盧と結びて兄弟と為る、猗盧を表して大單于と為し、代郡を以て之を封じ代公と為す。時に代郡は幽州に屬し、王浚は許さず、兵を遣わして猗盧を撃ち、猗盧は拒みて之を破る。浚は之に由りて琨と隙有り。

■ **【代** **【拓跋氏の代の自立へ】** 猗盧は封邑が國を去ること懸遠なりて、民は相い接せざるを以て、乃ち部落萬餘家を帥いて雲中より雁門に入り、琨に従いて陜北之地を求める。琨は制する能わず、且つ之に倚りて援と為さんと欲し、乃ち樓煩（山西省神地・五塞の二県、現・忻州市神池県、忻州市五寨県）、馬邑（馬邑・朔県、朔州市朔城区）、陰館（旧朔平府内、雁門道朔県、現・朔州市朔城区?）、繁峙（雁門道繁峙県、現・忻州市繁峙県）、崞（渾源県、忻州市原平市）の五縣（山西省北部雁門道に屬す）の民を陜南（石陜關の北）に従し、其の地を以て猗盧に與える。是に由りて猗盧は益々盛んなり。

■ **【劉琨は司馬越の兵を得られず】** 琨は遣使して太傅の越に言い、兵を出して共に劉聰、石勒を討たんと請う。越は苟晞及び豫州刺史の馮嵩を忌み、後患と為るを恐れ、許さず。琨は乃ち猗盧之兵を謝し、遣りて國に歸す。

漢 **【劉虎は餘衆を収め、西に河を渡り、朔方の肆盧川（山西省雁門道忻県、現・忻州市西北）に居り、漢主の聰は虎が宗室なるを以て、樓煩公に封ず。**

■ 壬子（23日）、劉琨を以て平北大將軍と為し、王浚を司空と為し、鮮卑の段務勿塵を進めて大單于と

為す。

■ **[京師と襄陽の攻防]** 京師は饑困すること日々甚しく、太傅の**越**は遣使して羽檄（急を要する 檄文、伝書鳩を遣う）を以て天下の兵を征（統は徴）し、入りて京師を援け使む。帝は使者に謂って曰く、

「我が為に諸征、鎮に語れよ。今日は尚ほ救う可し、後には則ち及ぶ無からん矣！」

既に而して卒に至る者無し。征南將軍の**山簡**は督護の**王萬**を遣わして兵を將いて入援し、**涅陽**（南陽郡の県、涅水の陽にあり、河南省汝陽道鎮平県、現・南陽市鎮平県）に軍す、**王如**の敗る所と為る。**如**は遂に大いに沔、漢を掠め、進みて襄陽に逼り、**簡**は城を嬰して自ら守る。(5-245p) 荊州刺史の**王澄**（江陵に治す）は自ら將して、京師を援けんと欲し、沔口（沔水が東流して夷水に合す所、湖北省襄陽道旧襄陽府内）に至り、**簡**の敗れるを聞き、衆は散り而して還る。朝議は多く都を遷して以て避難するを欲し、**王衍**は以て可からずと為し、車牛を賣り以て衆心を安ず。**山簡**は**嚴嶷**の逼る所と為り、襄陽より徙りて夏口に屯す。

漢 **[晋の王如は石勒と結び襄陽周辺陥落]** **石勒**は兵を引いて河を濟り、將に南陽に趣かんとし、**王如**、**侯脱**、**嚴嶷**等は之を聞き、衆一萬を遣わして襄城に屯し以て**勒**を拒ましむ。**勒**は之を撃ち、盡く其の衆を俘とし、進みて宛北に屯す。是の時、**侯脱**は宛に據り、**王如**は穰（漢の南陽郡の県、晋の義陽郡の県）に據る。**如**は素より**脱**と協せず、遣使して重く**勒**に賂して、結びて兄弟と為り、**勒**を説いて**脱**を攻め使む。**勒**は宛を攻め、之に克つ。**嚴嶷**は兵を引いて宛を救い、及ばず而して降る。**勒**は**脱**を斬る。**嶷**を囚え、平陽に送り、盡く其の衆を并せる。遂に南に襄陽を寇し、攻めて江西の壘壁三十餘所を抜く。還りて、襄城に趣き、**王如**は弟の**璃**を遣わして**勒**を襲わしむ。**勒**は迎え撃ち、之を滅し、復た江西に屯す。

■ **[司馬越是許昌に出陣し、洛陽荒廢]** 太傅の**越**は既に**王延**等を殺し（永嘉三年）、大いに衆望を失う。又た胡寇の益々盛んなるを以て、内に自ら安ぜず、乃ち戎服して入見し、**石勒**を討ち、且つ兗、豫を鎮集せんと請う。帝は曰く、

「今胡虜は郊畿を侵し逼り、人は固志無し、朝廷社稷は、公に倚頼す、豈に遠く出でて以て根本を孤とする可きや！」

對えて曰く、

「臣は出で、幸いにも而して賊を破れば、則ち國威は振るう可し、猶ほ坐して困窮を待つより愈る也。」
十一月、甲戌（15日）、**越**は甲士四萬を帥いて許昌に向かい、妃の**裴氏**、世子の**毘**及龍驤將軍の**李憚**、右衛將軍の**何倫**を留めて京師を守衛し、宮省を防察せしむ。**潘滔**を以て河南尹と為し、留事を總べしむ。**越**は表して行台を以て自らに隨わしめ、太尉の**衍**を用って軍司と為し、朝賢素望（素より名望ある者）は、悉く佐吏と為し、名將勁卒は、咸な其の府に入る。是に於いて宮省は復た守衛無く、荒饑は日々甚しく、殿内の死人は交々横たわる。盜賊は公行し、府寺營署は、並びて塹を掘り自ら守る。**越**は東して項に屯し、**馮嵩**を以て左司馬と為し、自ら豫州牧を領す。

■ 竟陵王の**楙**は帝に白す、

「兵を遣わして**何倫**を襲わしむべし」

克たず。帝は罪を**楙**に委ね、**楙**は逃竄し、免かるるを得る。

■ **[周馥の壽春遷都論]** 揚州都督の**周馥**は洛陽の孤危なるを以て、上書して壽春に遷都するを請う。太傅の**越**は**馥**の先ず己に白さず而して直に上書するを以て、大いに怒り、**馥**及び淮南太守の**裴碩**を召く。**馥**は肯えて行かず、**碩**をして兵を帥いて先ず進ま令む。**碩**は詐りて**越**の密旨を受けると稱し、**馥**を襲い、**馥**の敗る所と為り、退きて東城（淮南郡の県、安徽省淮泗道定遠県の東南、現・滁州市定遠県）を保つ。

■**前涼**〔**晉は前涼張軌に支援要請**〕詔して**張軌**に鎮西將軍、都督隴右諸軍事を加える。光祿大夫の**傅祗**、太常の**摯虞**は**軌**に書を遣わし、京師の饑匱するを以て告げる。**軌**は參軍の**杜勳**を遣わして馬五百匹、毳布（毛織物）三萬匹を獻ぜしむ。（5-246p）

■**大成**〔**譙登は遂に大成に歸す**〕成の太傅の**驥**は**譙登**（蜀漢の光祿大夫譙周の孫で西晉の官僚）を涪城に攻める。**羅尚**の子の**宇**及び參佐は素より**登**を惡み、其の糧を給せず。益州刺史の**皮素**は怒り、其の罪を治せんと欲す。**十二月**、**素**は巴郡に至り、**羅宇**等は人をして夜に**素**を殺さしめ、建平都尉の**暴重**は**宇**を殺し、巴郡は亂れる。**驥**は**登**の食盡き援絶つを知り、涪を攻めること愈々急なり。士民は皆な鼠を熏して之を食ひ、餓死するは甚だく、一人の離叛する者なし。**驥**の子の**壽**は先に**登**の所に在り（永興元年に羅尚は驥の妻と子の壽を掠めて譙登の所に置く）、**登**は乃ち之に歸す。三府（平西將軍府・益州刺史府・西戎校尉府、皆羅尚統括）の官屬は表して巴東監軍の南陽の**韓松**を以て益州刺史と為し、巴東に治せしむ。

■〔**苟純は連戦して曹嶷を破る**〕初め、帝は**王彌**、**石勒**の京畿に侵逼するを以て、**苟晞**に詔して州郡を督帥して之を討たしむ。會々**曹嶷**は琅邪を破り、北に齊地を収め、兵勢は甚だ盛んにして、**苟純**（永興元年に苟晞は魏植を討ち弟純を青州に留める）は城を閉じて自ら守る。**晞**は還りて青川を救ひ、**嶷**と連戦し、之を破る。

■〔**寧州刺史の王遜の活躍**〕是の歲、寧州刺史の**王遜**は官に到り、**李釗**を表して朱提太守と為す。時に寧州の外は成に逼られ、内に夷寇有り、城邑は丘墟となる。**遜**は惡衣菜食して、離散を招集して、勞俸して倦まず、數年之間に、州境は復た安ず。豪右の法を奉ぜざる者を誅するは十餘家なり。五苓の夷（85 卷惠帝太安二年）が昔亂首と為るを以て、撃ちて之を滅ぼし、内外は震服す。

■**漢**〔**漢の劉聰は嫡兄の劉恭を暗殺**〕漢主の**聰**は自ら次を越えて而して立つを以て、其の嫡兄の**恭**を忌む。**恭**が寝ねるに因りて、其の壁間に穴うがち、刺し而して之を殺す。

■**漢**〔**太弟の父をめぐる不協和音**〕漢の太后の**單氏**は卒す、漢主の**聰**は母の**張氏**を尊びて皇太后と為す。**單氏**は年少く美色なり、**聰**は焉を忝す（高貴な人を犯す）。太弟の**父**は屢々以て言を為し、**單氏**は慚恚し而して死す。**父**の寵は是に由りて漸く衰える、然れども**單氏**の故を以て、尚ほ未だ之を廢せざる也。**呼延后**は**聰**に言つて曰く、

「父死して子繼ぐは、古今の常道なり。**陛下**は**高祖**之業を承け、太弟は何為る者を哉！**陛下**は百年の後、**祭**の兄弟は必ず種なし矣。」

聰は曰く、

「然り、吾は當に徐ろに之を思うなり。」

呼延氏は曰く、

「事留まれば變生し、太弟は**祭**兄弟の浸く長ずるを見、必ず不安之志有り、萬一にも小人の其の間を交構する有れば、未だ必ずしも禍いの今日發せざるにあらざる也。」

聰は心に之を然りとす。**父**の舅の光祿大夫の**單沖**は泣いて**父**に謂つて曰く、

「疏は親を問せず。**主上**は河内王に意有り矣、**殿下**は何んぞ之を避けざるや！」

父は曰く、

「河瑞之末は、**主上**は自ら嫡庶之分を惟い、大位を以て**父**に讓る。**父**は**主上**の齒い長ずるを以て、故に相い推奉する。天下者、**高祖**之天下なり、兄終わり弟及ぶとも、何為れぞ不可なり！**祭**の兄弟は既に壯なり、猶ほ今日のごとき也。且つ子弟之間は、親疏は距たること幾くにして、**主上**は寧んぞ此の意有る可けん

乎！」

孝懷皇帝中永嘉五年（辛未，311年）

■春，正月，壬申（14日），苟晞は曹嶷の敗る所と為り，城を棄てて高平に奔る。

漢石勒は江、漢に保據せんと謀り，參軍都尉の張賓は以て可からずと為す。會々軍中に饑疫ありて，死者は太半となり，乃ち沔を渡り，江夏を寇し，癸酉（15日），之を抜く。

大成乙亥（17日），成の太傅の驥は涪城を抜き，譙登を獲る。太保の始は巴西を抜き，文石を殺す。是に於いて成主の雄は大赦し，改元して玉衡とする。譙登は成都に至り，雄は之を宥さんと欲す。登の詞氣は屈せず，雄は之を殺す。

大成【流民の重望・杜苾自立へ】巴蜀の流民は布きて荆、湘の間に在り，數々土民の侵し苦しむ所と為り，蜀人の李驥（太傅の驥とは別の人）は衆を聚めて樂郷に據りて反し，南平太守の應詹は醴陵（長沙郡の県、湖南省湘江道醴陵県、現・株洲市醴陵市）令の杜苾（統は杜弼）と共に撃ちて之を破る。王澄は成都内史の王機をして驥を討たせしめ，驥は降を請い，澄は偽りて許し而して襲いて之を殺す。其の妻子を以て賞と為し，八千餘人を江に沈め，流民は益々怨忿する。蜀人の杜疇等は復た反し，湘州參軍の馮素は蜀人の汝班と隙有り，刺史の荀眺に言つて曰く、

「巴、蜀の流民は皆な反せんと欲す。」

眺は之を信じ，盡く流民を誅さんと欲す。流民は大いに懼れ，四五萬家は一時に俱に反し，杜苾が州裡の重望なるを以て，共に推して主と為す。苾は自ら梁、益二州牧と稱し，湘州刺史を領す。

■【司馬睿は壽春の周馥を討伐】裴頔は救いを琅邪王の睿に求め，睿は揚威將軍の甘卓等をして周馥を壽春に攻め使む。馥の衆は潰え，項に奔り，豫州都督の新蔡王の（司馬）確は之を執り，馥は憂憤し而して卒す。確は，騰（司馬越の弟）之子也。

■【司馬睿は王敦を揚州刺史】揚州刺史の劉陶は卒す。琅邪王の睿は復た安東の軍容祭酒の王敦（去年建業に奔る）を以て揚州刺史と為し，尋いで都督征討諸軍事を加える。

■庚辰（22日），平原王の干は薨ず。

漢【石勒は許昌を抜く】二月，石勒は新蔡を攻め，新蔡の莊王の確を南頓に殺す。進みて許昌を抜き，平東將軍の王康を殺す。

■氏の苻成（羅尚に付く事は85卷惠帝太安二年）、隗文は復た叛し，宜都より巴東に趣く。建平都尉の暴重は之を討つ。重は因りて韓松を殺し，自ら三府の事を領す。

【司馬越は憂憤して病死、晉崩壊へ】

■【苟晞と対立し司馬越病死】東海の孝獻王の越は既に苟晞と隙有り（事は前卷永嘉二年に始まる），河南尹の潘滔、尚書の劉望等は復た従い而して之を譖る。晞は怒り，表して滔等の首を求め，揚言す、

「司馬元超（東海王越の字）は宰相と為り平らかならず，天下をして淆亂（混乱）せしめ，苟道將は豈に不義を以て之を使う可けんや！」

乃ち檄を諸州に移し、自ら功伐を稱し、越の罪状を陳べる。帝も亦た越が權を専らにし、多く詔命に違うを惡む。留まる所の將士の何倫等は、公卿を抄掠し、公主を逼辱する。密かに晞に手詔を賜い、之を討た使む。晞は數々帝と文書往來し、越は之を疑い、游騎をして成皋の間に於いて之を伺わ使め、果たして晞の使い及び詔書を獲る。乃ち檄を下して晞を罪状し、從事中郎の楊瑁を以て兗州刺史と為し、徐州刺史の裴盾と共に晞を討た使む。(5-248p) 晞は騎を遣わして潘滔を收めんとし、滔は夜遁げ、免かるるを得たり。尚書の劉曾、侍中の程延を執り、之を斬る。越は憂憤して疾と成り、後事を以て王衍に付ける。三月、丙子(19日)、項に於いて薨じ、秘して喪を發せず。衆は共に衍を推して元帥と為し、衍は敢えて當らず。以て襄陽王の范に譲り、范も亦た受けず。范は、瑋之子也。是に於いて衍等は相い與に越の喪を奉じて還りて東海に葬す。何倫、李暉等は越の薨じるを聞き、裴妃及び世子の毘を奉じて洛陽より東に走り、城中の士民は争いて之に隨う。帝は追貶して越を縣王と為し、苟晞を以て大將軍、大都督と為し、青、徐、兗、豫、荆、揚の六州諸軍事を督せしむ。

■ [益州方面の混乱は続く] 益州の將吏は共に暴重を殺し、巴郡太守の張羅を表して三府の事を行わしむ。羅は隗文等と戦い、死し、文等は吏民を驅掠して、西に成に降る。三府の文武は共に平西司馬の蜀郡の王異を表して三府の事を行わしめ、巴郡太守を領せしむ。

■ [張光は累年にして漢中を平定] 初め、梁州刺史の張光は諸郡守に魏興に於いて會し、共に進み取るを謀る。張燕は唱えて言う、

「漢中は荒敗し、大賊に迫近し、克復之事は、當に英雄を俟つべし。」

光は燕が鄧定の略を受け(前卷永嘉元年)、漢中を失うを致し、今復た衆を沮むを以て、呵して出て之を斬る。兵を治めて進み戦い、累年(張光が梁州刺史になるは前卷二年にある)乃ち漢中に至るを得、荒殘を綏撫し、百姓は悦び服す。

漢 [越之喪を追い石勒は晉の王族を一網打尽] 夏、四月、石勒は輕騎を帥いて太傅の越之喪を追い、苦縣(陳郡の県、河南省開封道鹿邑県、現・周口市鹿邑県)の寧平城に及び、大いに晉兵を敗り、騎を縦ちて圍み而して之を射ち、將士十餘萬人は相い踐んで山の如し、一人の免るるを得る者無し。太尉の衍、襄陽王の范、任城王の濟、武陵莊の王澹、西河王の喜(宣帝の弟の西河穆王斌の後)、梁懷王の禧、齊王の超(齊王冏の子)、吏部尚書の劉望、廷尉の諸葛銓、豫州刺史の劉喬、太傅長史の庚金全等を執り、之を幕下に坐さしめ、問うに晉の故を以てす。衍は具に禍敗之由を陳じ、

「計は己に在らず」

と雲う。且つ自ら言う、

「少くして宦情無く、世事に豫らず」(この言は清談的な思想の悪影響、世事から離れるを尊しとする)

因りて勒に尊號を稱するを勧め、以て自ら免れんことを冀う。勒は曰く、

「君は少壯にして朝に登り、名は四海を蓋い、身は重任に居る、何の宦情無しと言うを得る邪! 天下を破壊するは、君に非らざれば而して誰や!」

左右に命じて扶けて出でしむ。衆人は死を畏れ、多くは自ら陳述する。獨り襄陽王の范は神色儼然として、顧みて之を呵して曰く、

「今日之事は、何を復た紛紜たり!」

勒は孔叢に謂って曰く、

「吾は天下を行くこと多し矣、未だ嘗て此の輩ともがらの人を見ず、存ず可きに当たる乎（之を存すると欲するは諸人の風姿の清楚なるを以てなり）？」

萇は曰く、

「彼は皆な晋之王公なり、終に吾が用と為らず。」

勒は曰く、

「然りと雖も、要かならず加えるに鋒刃を以てす可からず。」

夜、人をして牆を排して之を殺さしむ。濟は、宣帝の弟の子の景王陵之子。禧は、澹之子也。越の柩を剖し、其の屍を焚き、曰く、

「天下を亂る者は此の人也、(5-249p) 吾は天下の為に之に報じん、故に其の骨を焚きて以て天地に告げん。」

■ 【司馬睿は裴妃の恩義に報いる】 何倫等は洧倉（河南省開封道許昌県、現・許昌市建安区）に至り、勒に遇い、戦いて敗れ、東海の世子の毘及び宗室四十八王は皆な勒に没す。何倫は下邳に奔り、李暉は廣宗に奔る。裴妃は人の掠賣する所と為り、之久しく、江を渡る。初め、琅邪王の睿之建業に鎮するは、裴妃の意也。故に睿は之を徳とし、厚く存撫を加え、其の子の沖を以て越の後を繼がしむ。

漢漢の趙固、王桑は裴盾（彭城に在り）を攻め、之を殺す。

■ 【杜苾は長沙・武昌を席卷】 杜苾は長沙を攻める。五月、荀眺は城を棄てて廣州に奔り、苾は追いて之を擒える。是に於いて苾は南に零、桂を破り、東に武昌を掠め、二千石、長吏を殺すこと甚だ衆し。

【洛陽陥落、帝は平陽へ】

■ 【司馬越没後の新体制】 太子太傅の傅祗を以て司徒と為し、尚書令の荀籛を司空と為し、王浚に大司馬、侍中、大都督を加え、幽、冀の諸軍事を督さしめ、南陽王の模を太尉、大都督と為し、張軌を車騎大將軍と為し、琅邪王の睿を鎮東大將軍と為し、揚、江、湘、交、廣の五州諸軍事を兼ねて督さしむ。

■ 【司馬保を上邳派遣と陳安活躍】 初め、太傅の越は南陽王の模が關中を綏撫する能わざるを以て（時に漢中は飢荒疾病して制し難し）、表して徴して司空と為す。將軍の淳于定は模を説いて徴に就かざらしめ、模は之に従う。表して世子の保を遣わして平西中郎將と為し、上邳に鎮ぜしめ、秦州刺史の裴苞は之を拒む。模は帳下都尉の陳安をして苞を攻めしめ、苞は安定に奔り、太守の賈疋は之を納める。

■ 【帝は荀晞の倉垣遷都に行くも出られず】 荀晞は表して倉垣に遷都するを請い、從事中郎の劉會をして船數十艘、宿衛五百人、穀千斛を將いて帝を迎えしむ。帝は將に之に従わんとし、公卿は猶豫し、左右は資財を戀い、遂に行くを果たさず。既に而して洛陽は饑困し、人は相い食み、百官の流亡する者は什に八九なり。帝は公卿を召して議し、將に行かんとし而して衛從は備わらず。帝は手を撫して歎じて曰く、

「如何ぞ會すなわち車輿無きや！」

乃ち傅祗をして出でて河陰（河南郡の県、河南省河洛道孟津県の東、現・洛陽市孟津区）に詣り、舟楫を治めしめ、朝士數十人は導從する。帝は歩みて西掖門を出で、銅駝街に至り、盜の掠む所と為り、進むを得ず而して還る。度支校尉の東郡の魏浚は、流民數百家を帥いて河陰之硤石を保ち、時に劫掠して穀麥を得て、之を獻じ。帝は以て揚威將軍、平陽太守と為し、度支は故の如し。

漢漢 ■ 【劉聰らは洛陽を落とす帝を平陽に送る】 漢主の聰は前軍大將軍の呼延晏をして兵二萬七千を將いて洛陽を寇せしめ、河南に及ぶ比こゝ、晋兵は前後十二敗し、死者は三萬餘人。始安王の曜、王彌、石勒は皆な兵を引いて之に會す。未だ至らずして、晏は輜重を張方の故の壘（洛陽の西七里）に留める。癸未（27

日)、先ず洛陽に至る。甲申(28日)、平昌門(洛城の南面東頭の第一門)を攻める。丙戌(30日)、之に克ち、遂に東陽門及び諸府寺を焚く。六月、丁亥(1日)朔、晏は外繼の至らざるを以て、俘掠し而して去る。帝は舟を洛水に具え、將に東に走らんとし、晏は盡く之を焚く。庚寅(4日)、荀籛及び弟の光祿大夫の組は輶轅に奔る。(5-250p) 辛卯(5日)、王彌は宣陽門に至る。壬辰(6日)、始安王の曜は西明門に至る。丁酉(11日)、王彌、呼延晏は宣陽門に克ち、南宮に入り、太極前殿に升起、兵を縦ちて大掠し、悉く宮人、珍寶を收める。帝は華林園の門を出で、長安に奔らんと欲し、漢兵は追いて之を執り、端門に幽す。曜は西明門より入りて武庫に屯す。戊戌(12日)、曜は太子の詮、吳孝王の晏、竟陵王の楸、右僕射の曹叡、尚書の閻丘沖、河南尹の劉默等を殺し、士民の死する者は三萬餘人なり。遂に諸陵を發掘し、宮廟を焚き、官府は皆な盡く。曜は惠帝の羊皇后を納れ、帝及び六璽を平陽に遷す。石勒は兵を引いて輶轅を出、許昌に屯す。光祿大夫の劉蕃(并州にいる劉琨の父)、尚書の盧志は并州に奔る。

漢丁未(21日)、漢主の聰は大赦し、改元して嘉平とする。帝を以て特進左光祿大夫と為し、平阿公に封じ、侍中の庾鋹、王俊を以て光祿大夫と為す。鋹は、叡之兄也。

漢[劉曜と王彌は隙有り]初め、始安王の曜は王彌が己を待たずして至り、先に洛陽に入るを以て、之を怨む。彌は曜に説いて曰く、

「洛陽は天下之中にして、山河は四塞し、城池、宮室は修營を假らず、宜しく主上に白し平陽より徙りて之に都すべし。」

曜は以えらく天下は未だ定まらず、洛陽は四面に敵を受け、守る可からずと、彌の策を用いず而して之を焚く。彌は罵して曰く、

「屠各(この場合屠各を異民族の代表とする意味)の子、豈に帝王之意有る邪？」

遂に曜と隙有り、兵を引いて東に項關に屯す。前の司隸校尉の劉暉は彌を説いて曰く、

「今九州は麩のごとく沸き、群雄は競い逐う。將軍は漢に於いて不世之功を建てる、又た始安王と相い失い、將た何を以てか自ら容れん！東して本州(王彌は青州の東來の人)に據り、徐に天下之勢いを觀るに如かず、上は以て四海を混壹す可く、下は鼎峙之業を失わず、策之上なる者也。」

彌は心に之を然りとする。

【晉室の新体制構築】

■[河陰の行臺] 司徒の傅祗は行臺を河陰に建て、司空の荀籛は陽城(河南省河洛道登封県の東、現・鄭州市登封市)に在り、河南尹の華薈は成皋に在り、汝陰(安徽省淮泗道阜陽県、現・阜陽市潁州区)太守の平陽の李矩は之が爲に屋を立て、穀を輸びて以て之に給す。薈は、叡之曾孫也。

■[司馬睿を盟主にする体制] 籛と弟の組、族子の中護軍の崧、薈と弟の中領軍の恆は、行台を密(滎陽郡の県、河南省開封道密県、現・鄭州市新密市)に建て、四方に檄を傳え、琅邪王の睿を推して盟主と為す。籛は製を承けて崧を以て襄城太守と為し、矩を滎陽太守と為し、前冠軍將軍の河南の褚翬を梁國內史と為す。揚威將軍の魏浚は洛北の石櫟塢に屯す。劉琨は制を承けて浚に河南尹を假し、浚は荀籛に詣りて軍事を咨謀する。籛は李矩を邀えて同じく會し、矩は夜之に赴く。矩の官屬は皆な曰う、

「浚は信ずる可からず、夜往くは宜しからず。」

矩は曰く、

「忠臣は同心す、何の疑う所ある乎！」

遂に行き、相い與に結び歡び而して去る。浚の族子の該は、衆を聚めて一泉塢(宜陽郡、河南省河洛道宜陽県、

現・洛陽市宜陽県)に據り、**籓**は以て武威將軍と為す。

■ **[苟晞は司馬端を皇太子に]** 豫章王の**端**は、太子の**詮**之弟也、東に倉垣に奔り、**苟晞**は群官を率いて奉じて以て皇太子と為し、行臺を置く。**端**は制を承けて**晞**を以て太子太傅を領し、(5-251p) 中外諸軍を都督し、尚書事を録せしめ、倉垣より徙りて蒙城(梁國に属す、安徽省淮泗道蒙城県、現・亳州市蒙城県)に屯す。

■ **[司馬業を許昌にて閻鼎が支える]** 撫軍將軍の秦王の**業**は、吳の**孝王**之子、**苟籓**之甥也、年は十二、南に密に奔り、**籓**等は之を奉じ、南に許昌に趣く。前豫州刺史の天水の**閻鼎**は、西州の流民數千人を密に聚め、郷里に還らんと欲す。**苟籓**は鼎の才有り而して衆を擁するを以て、**鼎**を用いて豫州刺史と為し、中書令の**李紇**、司徒左長史の彭城の**劉疇**、鎮軍長史(東海王司馬越の子の**田比**は鎮軍將軍となり**顗**は長史)の**周顗**、司馬の**李述**等を以て之が參佐と為す。**顗**は、**浚**之子也。

■ **[江東の司馬睿の賢俊登用]** 時に海内は大亂し、獨り江東のみは**差安んじ**、中國の士民の亂を避ける者は多く南に江を渡る。鎮東司馬の**王導**は琅邪王の**睿**を説き其の賢俊を收め、之と事を共にせしむ。**睿**は之に従い、掾屬(漢以来公府の屬官に掾・屬あり)百餘人を辟し、時の人は之を百六掾と謂う。前潁川太守の勃海の**刁協**を以て軍容祭酒と為し、前東海太守の**王承**、廣陵相の**卞壺**を從事中郎と為し、江寧令の**諸葛恢**、歷陽參軍の陳國の**陳頴**を行參軍と為し、前太傅の掾の**庾亮**を西曹掾と為す。**承**は、**渾**之弟の子、**恢**は、**靚**之子、**亮**は、**亮**之弟の子也。

■ **[江州刺史の華軼の討伐]** 江州刺史の**華軼**は、**歆**之間孫也、自ら以えらく朝廷之命を受け(永嘉中に江州刺史)而して琅邪王の**睿**の督する所と為り、多く其の教令を受けず。郡縣は多く之を諫め、**軼**は曰く、「吾は詔書を見んと欲する耳。」

睿が**苟籓**の檄を承け、製を承けて官司を署置し、長吏を改易するに及びて、**軼**は豫州刺史の**裴憲**と皆な命に従わず。**睿**は揚州刺史の**王敦**、歷陽内史の**甘卓**を遣わし揚烈將軍の廬江の**周訪**と兵を合わせて**軼**を撃たしむ。**軼**の兵は敗れ、安成(江西省廬陵道安福県、現・吉安市)に奔り、**訪**は追いて之を斬り、其の五子に及ぶ。**裴憲**は幽州に奔る。**睿**は**甘卓**を以て湘州刺史と為し、**周訪**を尋陽太守と為し、又た揚武將軍の**陶侃**を以て武昌太守と為す。

【王浚は皇帝僭称へ、劉曜長安進出、石勒は勢力拡大】

■ **[王浚は皇太子を擁して幽州に自立宣言]** **秋**、**七月**、**王浚**は壇を設けて告類(事類を以て天及び五帝に告げる祭)し、**皇太子**(誰かは明示せず)を立て、天下に佈告し、中詔を承けると稱し制を承けて(皇帝に代わって諸侯や守相を任命する事)封拜し、百官を備え置き、征、鎮を列署し、**苟籓**を以て太尉と為し、琅邪王の**睿**を大將軍と為す。**浚**は自ら尚書令を領し、**裴憲**(幽州に逃げてきたばかり)及び其の婿の**裴嵩**(裴嵩)を以て尚書と為し、**田征**(続は田徽)を以て兗州刺史と為し、**李暉**を青州刺史と為す。

■ **[漢][長安の司馬模は敗れ誅殺、劉曜は長安駐屯]** 南陽王の**模**は牙門の**趙染**をして蒲板(平陽の劉聰の行路、山西省河東道永濟県、現・運城市永濟市)に戍せ使め、**染**は馮翊太守を求めて得ず而して怒り、衆を帥いて漢に降り、漢主の**聰**は**染**を以て平西將軍と為す。**八月**、**聰**は**染**と安西將軍の**劉雅**を遣わして騎二萬を帥いて**模**を長安に攻めしめ、河内王の**粲**、始安王の**曜**は大衆を帥いて之に繼ぐ。**染**は**模**の兵を潼關に敗り、長驅して下邳(県名、陝西省關中道渭南県の東北、現・渭南市臨渭区)に至る。涼州の將の**北宮純**は長安より其の衆を帥いて漢に降る。漢兵は長安を圍み、**模**は**淳于定**を遣わして出でて戦わしめ而して敗る。**模**の倉庫は虚竭し、士卒は離散し、遂に漢に降る。(5-252p) **趙染**は**模**を河内王の**粲**に送る。**九月**、**粲**は**模**を殺す。關西は饑饉し、白骨は野を蔽い、士民の存する者は百に一二無し。**聰**は始安王の**曜**を以て車騎大將軍、雍州牧と為し、更

めて中山王に封じ、長安に鎮せしむ。王彌を以て大將軍と為し、齊公に封じる。

■漢 [石勒は苟晞を蒙城に擒とする] 苟晞は驕奢にして苛暴なり。前遼西太守の閻亨は、續之子也、數々晞を諫め、晞は之を殺す。從事中郎の明預は疾有り、自ら輿して入りて諫める。晞は怒りて曰く、

「我が閻亨を殺すは、何ぞ人の事に關せん、而して病いを輿して我を罵るや！」

預は曰く、

「明公は禮を以て預を待つ、故に預は禮を以て自ら盡くす。今明公は預に怒り、其れ遠近の明公の怒るを如何せん！桀は天子と為り、猶ほ驕暴を以て而して亡べり、況んや人臣を乎！願はくは明公は且く是の怒りを置き、預之言を思うべし。」

晞は従わず。是に由りて衆心は離れ怨み、加えて疾疫、饑饉を以てす。石勒は王贊を陽夏（陳留郡の県、河南省開封道太康県、現・周口市太康県）に攻め、之を擒とする。遂に蒙城を襲い、晞及び豫章王の端を執り、晞の頸に鎖し、以て左司馬と為す。漢主の聰は勒を拜して幽州牧とす。

漢 [石勒は王彌と確執の末斬る] 王彌は勒と、外は相い親しみ而して内は相い忌む。劉暉は彌に説いて曹嶷之兵を召して以て勒を圖ら使む。彌は書を為り、暉をして嶷を召さ使め、且つ勒の兵を邀え共に青州に向かわんとする。暉は東阿（濟北国の県、山東省東臨道陽穀県・東阿県、現・聊城市東阿県）に至り、勒の游騎は之を獲り、勒は潜かに暉を殺し而して彌は知らず。會々彌の將の徐邈、高梁は輒ち所部の兵を引いて去り、彌の兵は漸く衰える。彌は勒が苟晞を擒とするを聞き、心は之を惡むも、書を以て勒を賀して曰く、

「公は苟晞を獲り而して之を用いるは、何ぞ其れ神なる也！晞をして公の左と為し、彌を公の右と為さ使めば、天下を定めるに足りざらん也。」

勒は張賓に謂って曰く、

「王公は位は重く而して言は卑し、其の我を圖らんとするは必ず矣。」

賓は因りて勒に彌の小しく衰えるに乗り、誘い而して之を取るを勸める。時に勒は方に乞活陳午と蓬關（陳留の浚儀県にあり、河南省開封道開封県東南、尉氏県の西北、現・開封市祥符区）に相い攻め、彌も亦た劉瑞と相い持つこと甚だ急なり。彌は救いを勒に請い、勒は未だ之を許さず。張賓は曰く、

「公は常に王公（を殺す）之便を得ざるを恐れる。今日は王公を以て我に授ける矣。陳午は小豎なり、憂うるに足らず。王公は人傑にして、當に早く之を除くべし。」

勒は乃ち兵を引いて瑞を撃ち、之を斬る。彌は大いに喜び、勒が實に己に親しむと謂い、復た疑わざる也。

冬、十月、勒は彌を請いて己吾（県、安徽省淮泗道靈璧県、現・宿州市靈璧県）に燕（くつろぐ）す。彌は將に往かんとし、長史の張嵩は諫める、聽かず。酒酣にして、勒は手ずから彌を斬り而して其の衆を并わせ、漢主の聰に表して、彌は叛逆すると稱す。聰は大いに怒り、遣使して勒を讓め、

「専ら公輔を害し、無君之心有り」、

然れども猶ほ勒に鎮東大將軍、督並、幽二州諸軍事を加え、并州刺史を領せしめ、以て其の心を慰める。

苟晞、王贊は潜かに勒に叛せんと謀り、勒は之を殺し、晞の弟の純を并す。

漢 [石勒は揚子江に臨む] 勒は兵を引いて豫州の諸郡を掠し、江に臨み而して還り、葛陂（汝南郡鯽陽県にあり、河南省汝陽道新蔡県、現・駐馬店市新蔡県）に屯す。（5-253p）

漢 ■ [石勒は劉琨の懷柔を断る] 初め、勒は人の掠賣（一時奴隸として売られた）する所と為る也、其の母の王氏と相い失う。（是に至りて）劉琨は之を得、其の從子の虎（石虎）を并せて勒に送り、因りて勒に書を遺りて曰く、

「將軍の用兵は神の如し、向かう所敵無し。天下に周流して而も足を容れる之地無く、百戦百勝し而して尺寸之功無き所以の者は、蓋し主を得れば則ち義兵と為り、逆に附けば則ち賊衆となるが故也。成敗之數は、呼吸に似たる有り、之を吹けば則ち寒く、之を嘘はけば則ち温かし。今侍中、車騎大將軍、領護匈奴中郎將、襄城郡公を相い授けん、將軍は其れ之を受けよ！」

勅は書を報じて曰く、

「事功は途を殊ことにす、腐儒の知る所に非らず。君は當に節を本朝に逞たくましくすべし、吾は自ら難を夷たいらげるを效と為さん。」

琨に名馬、珍寶を遺り、厚く其の使いに禮し、謝し而して之を絶つ。

漢 **[石勒は石虎の凶暴無頼を寵任]** 時に虎は年十七、殘忍にして度無く、軍中の患いと為る。勅は母に白して曰く、

「此の兒は凶暴無頼なり、軍人をして之を殺さ使めんは、聲名惜しむ可し。自ら之を除くに若かず。」

母は曰く、

「快牛は犢(生贄)と為るに、多く能く車を破る、汝は小しく之を忍ぶべし！」

長ずるに及び、弓馬に便じ、勇は當時に冠たり。勅は以て征虜將軍と為し、城邑を屠る毎に、遺類すくな有る鮮し。然れども衆を御して嚴に而して煩わしからず、敢えて犯す者莫く、指授して攻め討つに、向かう前無く、勅は遂に之を寵任す。勅は滎陽太守の李矩を攻め、矩は撃ちて之を卻ける。

■ **[索綝は安定から漢に反撃]** 初め、南陽王の模は從事中郎の索綝を以て馮翊(現・渭南市・西安市) 太守と為す。綝は、靖之子也。模は死して、綝は安夷護軍(司は長安に在り) の金城の麴允、頻陽(県、陝西省關中道富平県の東北、現・渭南市富平県) 令の梁肅と、俱に安定に奔る。時に安定太守の賈疋か がは諸氏、羌と皆な任子(人質)を漢に送り、綝等は之に陰密(安定郡の県、甘肅省涇原道靈臺県の西、現・平涼市靈台县) に遇い、擁して臨涇(安定郡の治所、甘肅省涇原道鎮原県、現・慶陽市鎮原県) に還り、疋と晋室を興復せんと謀り、疋は之に従う。乃ち共に疋を推して平西將軍と為し、衆五萬を帥いて長安に向かう。雍州刺史の麴特(新平を守る)、新平太守の竺恢は皆な漢に降らず、疋の兵を起こすを聞き、扶風太守の梁綜と衆十萬を帥いて之に會す。綜は、肅之兄也。漢の河内王の桀は新豐に在り、其の將の劉雅、趙染をして新平を攻め使め、克たず。索綝は新平を救い、大小百戦し、雅等は敗退する。中山王の曜は疋等と黃丘(馮翊雲陽県の黃嶽山下、陝西省關中道淳化県、現・咸陽市淳化県) に戦い、曜の衆は大いに敗れる。疋は遂に漢の梁州(まさに涼州に作るべし) 刺史の彭蕩仲(安定の盧水胡)を襲い、之を殺す。麴特等は桀を新豐に撃破し、桀は平陽に還る。是に於いて疋等の兵勢は大いに振い、關西の胡、晋は翕然として響應す。

■ **[閻鼎は秦王業と關中進出]** 閻鼎えんていは秦王の業を奉じて關に入り、長安に據りて以て四方に號令せんと欲す。河陰令の傅暢は、祗之子也、亦た書を以て之に勸め、鼎は遂に行く。荀藩、劉疇、周敷、李述等は、皆な山東人なり、西に行くを欲せず、中途に逃げ散る。鼎は兵を遣わして之を追うも、及ばず、李矩等を殺す。鼎は業と宛より武關に趣き、上洛(県、關中道商県、現・商洛市商州区) に於いて盜に遇い、士卒は敗れ散り、其の餘衆を收め、進みて藍田(現・西安市藍田県) に至る、人をして賈疋に告げ使め、**(5-254p)** 疋は兵を遣わして之を迎える。**十二月**、雍城に入り、梁綜をして兵を將いて之を衛ら使む。

■ **[南遷した周顛は王導と意気投合]** 周顛は琅邪王の睿に奔り、睿は顛を以て軍諮祭酒と為す。前騎都尉

の譙國の桓彝も亦た亂を避けて江を過ぎ、睿の微弱なるを見、顓に謂って曰く、

「我は中州の多故なるを以て、此に來たりて全くするを求めたり、而るに單弱なること此くの如し、將たまた何を以て濟さん！」

既に而して王導を見、共に世事を論じ、退きて、顓に謂って曰く、

「尙に管夷吾（管仲、王導をたとえる）を見る、復た憂い無し矣！」

■ 【江河之異ならず】 諸名士は相い與に新亭に登り游宴する、周顓は中坐して歎じて曰く、

「風景は殊ならず、目を舉げれば江河之異なる有るや！」（川沿いの風景は黄河も揚子江も異ならず）

因りて相い視て流涕す。王導は愀然として色を變えて曰く、

「當に共に力を王室に戮せ、神州（中国）を克復し、何ぞ楚囚と作りて對して泣くに至る邪！」
衆は皆な涙を収めて之を謝す。

■ 【現実逃避の老荘思想】 陳顓は王導に書を遺りて曰く、

「中華の傾弊する所以の者は、正に才を取るに所を失い、白望（虚名）を先に而して實事を後にするを以て、浮かれ競い驅馳して、互いに相い貢ぎ薦し、言の重き者は先ず顯われ、言の輕き者は後に敘せられ、遂に相い波扇（水を以て譬えとする、風起れば波生じ相扇ぎて動く）し、乃ち陵遲（山地や丘陵がしだいに低くなること）するに至る。加えるに莊、老之俗有り、朝廷を傾け惑わせ、望を養う者は弘雅と為し、政事の者を俗人と為し、王職は恤えず、法物は墜ち喪えり。夫れ遠きを制せんと欲すれば、先ず近きより始めるべし。今宜しく改め張り（漢の董仲舒は政を論じて曰く、譬えば琴瑟の如く必ず改めて更にこれを張り、乃ち鼓す可きなり）、賞を明らかにして罰を信にして、卓茂（40 卷漢の光武帝建武元年）を密縣に拔き、朱邑（舒の桐郷の畜夫と為り、廉平にして苛ならず。漢の宣帝挙げてこれを用い、官は大司農に至る）を桐郷に顯わすべし、然る後に大業は擧げる可く、中興を冀う可き耳。」

導は従う能わず。

【幽州・遼東の王浚と劉琨、慕容廆と石勒】

■ 【王浚は劉琨の勢力拡大を阻む】 劉琨は招き懐かしむに長じ、而して撫で御するに短なり、一日之中に、歸する者は數千と雖も、而して去る者も亦た相い繼ぐ。琨は子の遵を遣わして兵を代公の猗盧に請わしめ、又た族人の高陽内史の希を遣わして衆を中山に合わせしめ、幽州の統べる所の代郡、上谷、廣寧之民は多く之に歸し、衆は三萬に至る。王浚は怒り、燕相の胡矩を遣わして諸軍を督し、遼西公の段疾陸眷と共に希を攻めしめ、之を殺し、三郡の士女を驅略し而して去る。疾陸眷は、務勿塵之子也。猗盧は其の子の六修を遣わして兵を將いて琨を助けて新興に戍せしむ。

■ 【邢延は碧石を劉琨に獻ず、漢に降る】 琨の牙門將の邢延は碧石を以て琨に獻じ、琨は以て六修に與え、六修は復た延に就きて之を求めも、得ず、延の妻子を執る。延は怒り、所部の兵を以て六修を襲い、六修は走り、延は遂に新興を以て漢に付き、兵を請いて以て并州を攻める。

▲ 【慕容廆に歸する者衆し】 李臻之死する也（永嘉三年）、遼東の附塞の鮮卑の素喜連、木丸津（鮮卑の二部）は臻の為に仇を報いるに托し、攻めて諸縣を陥し、士民を殺し掠め、屢々郡兵を敗り、連年寇を為す。東夷校尉の封釋は討つ能わず、連と和を請い、連、津は従わず。民は業を失い、慕容廆に歸する者は甚だ衆く、廆は稟給して遣り還し、（5-255p）留まるを願う者は即ち之を撫して存す。

▲ 【若き慕容翰の戰略眼、遼東郡復活】 廆の少子の鷹揚將軍の翰は廆に言つて曰く、

「古より有為之君は、天子を尊び以て民望に従い、大業を成さざるは莫し。今連、津は外に寵本を以て名

と為し、内に實に災いを幸いとして亂を為す。封使君は已に本を誅し（永嘉三年）和を請い、而して寇暴已まず。中原は離亂し、州師（平州の兵、東夷校尉の統括）は振わず、遼東は荒散し、之を救恤する莫し、單于（慕容廆は鮮卑の大單于を称す）は其の罪を數めて而して之を討つに若かず。上は則ち遼東を興復し、下は則ち二部を併吞すれば、忠義は本朝に彰かに、私利は我が國に歸す、此れは霸王之基也。」

廆は笑いて曰く、

「孺子は乃ち能く此に及ぶ乎！」

遂に衆を帥いて東に連、津を撃ち、翰を以て前鋒と為し、破りて之を斬り、盡く二部之衆を并せる。掠する所の民三千餘家を得、及ち前に廆に歸する者は悉く以て郡に付け、遼東は頼りて以て復た存す。

▲ [慕容廆は封氏一族を得る] 封釋は疾病し、其の孫の弈は廆に屬す。釋は卒し、廆は弈を召いて與に語り、之に説びて、曰く、

「奇士也！」

小都督に補す。釋の子の冀州主簿の俊、幽州參軍の抽は喪に來奔す。廆は之に見え、曰く、

「此の家は扞扞（強健たる力ある貌）たる千斤の犍（壯健な牛）也。」

道の通ぜざるを以て、喪は還るを得ず、皆な留まりて廆に仕え、廆は抽を以て長史と為し、俊を參軍と為す。王浚は妻の舅の崔恣を以て東夷校尉と為す。恣は、琰之曾孫也。

令和3年6月4日 翻訳開始 12048 文字

令和3年6月14日 翻訳終了 23844 文字 現代地名・年表対応

令和3年11月13日 書下し完成 24090 文字